世界遺産と地域の遺産をむすぶまちづくり
斑鳩の記憶アーカイブ化事業による文化遺産の把握

Connecting World and Local Heritage: Archiving Town Memories of Ikaruga Town

谷川竜一／松本康隆
Ryuichi Tanigawa, Yasutaka Matsumoto

世界遺産と地域の遺産をむすぶまちづくり
斑鳩の記憶アーカイブ化事業による文化遺産の把握と活用

谷川竜一
金沢大学新学術創成研究機構　助教
tryuichi@staff.kanazawa-u.ac.jp
松本康隆
南京工業大学建築学院　特聘副教授
songben@njtech.edu.cn

Japan's first UNESCO World Heritage Site is Horyuji Temple in Ikaruga Town, Nara Prefecture. Horyuji Temple, constructed in the 7th century, is famous for being the oldest existing wooden building in the world, and residents of Ikaruga regard it as their town's symbol. Between 2000 and 2005, the authors conducted a comprehensive survey on the modern architectural heritage in Ikaruga and composed an inventory of 550 heritage sites. This inventory indicates that Ikaruga has a rich architectural history in addition to Horyuji Temple, a fact that astonished the town's residents. Following this activity, in 2012 the authors created, and have since maintained, a database of old photos of the modern heritage and landscape sites of Ikaruga in collaboration with the Ikaruga Town Library. This paper provides an introduction to the methods and practices that are involved in conducting a heritage survey and provides the know-how necessary to contribute to and improve the cultural environment by utilizing and connecting the public architectural heritage with residents' private histories.

Key Words: World Heritage, Horyuji Temple, Modern Architectural Heritage, Database

１．はじめに―研究の目的と背景

1990年代以降、世界遺産を観光利用に用いる世界遺産ブームが続いている[1]。筆者らは、日本で最初に世界遺産に認定された法隆寺を抱える斑鳩町で育った個人的背景を持っており、こうしたブームが地域社会に浸透・影響していくプロセスを、地域に即した生活世界のなかで体験してきた。

そもそも斑鳩町は日本古代の歴史的な建築遺産を多く抱えていたが、法隆寺が世界遺産としてさらなる注目を浴びたことにより、逆に古代以外の時代――特に近過去の建築遺産に対する関心は、十分に高まってこなかった経緯がある。そして法隆寺があるということは、美しい文化的景観を持つまち――すなわち住宅を作れば売れるまちとしての斑鳩町イメージに繋がり、そのイメージが一人歩きするなかで、斑鳩町にむしろ無秩序な開発を呼び込んでしまった可能性がある。ある文化遺産が世界遺産として認定されると、観光や住宅に関する圧力が高まり、従

[1] 2017年８月現在で世界中に1073件の世界遺産（文化遺産、自然遺産、複合遺産）があり、167の地域にまたがっている。こうしたことを受け日本においては「増えすぎ」という意見も目立つという（NHK解説アーカイブス「問われる世界遺産の価値」（時論公論）2017年８月22日、www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/278003.html

来の景観やその他の文化遺産が失われるリスクが増すことは、これまでも議論されてきた。世界遺産は、地域におけるそれ以外の文化遺産を意識しにくくさせ、同時に一種の文化的アイコンとして機能するために、新しい宅地開発や観光をその地に呼び込むような「魅力」をもつのである。

以上のような問題意識のもと、筆者らは斑鳩町に残る近世・近代（年代にして概ね1800年頃から1960年代頃まで。一部高度成長以降の現代のものも含む）の――つまりは近過去の建築遺産の悉皆調査を行い、約550件の建築遺産台帳を作成した。それにより、斑鳩町には住宅を中心とする多くの近過去の建築遺産があり、その保全・活用によってより文化的な住環境を獲得できる可能性があることを示唆してきた。しかしながら、それらの多くは住宅などの私的ないし小型の非公共建築であり、その価値を住民全体で共有するには限界がある。そのため多様な情報を掛け合わせて個々の価値を重ね合わせたり、繋げたりしていく必要があると筆者らは考えた。準備期間も含めると、2012年から斑鳩町立図書館・聖徳太子歴史資料室と連携し、斑鳩町の近世・近代建築が街並として写り込んだ古写真――主に住民の生活写真――を集めるワークショップを半年から１年に１回程度、全６回開催してきた。そしてその写真を保管・整理・公開するためのデータベースの開発を進めてきた。

本稿では以上の近過去の建築遺産の遺産台帳作成活動と、地域の古写真の収集・公開活動の概要を具体的に提示する。それにより、世界遺産が注目されるなかで、本来複数あるはずの地域の歴史・文化的な価値やコンテクストが、忘れ去られないようにするための事例提示を行う。

なお、文化遺産は有形・無形さまざまなものがあるが、筆者らは専門とする建築史の観点から、近世・近代に建設された近過去の建築遺産に注目して研究を行っている。またそれらに注目する理由は、文化遺産のなかでも建築遺産が都市計画のような計画技術的側面と親和性が高いと考えているからであり、したがって研究成果を実践的側面へ比較的接続しやすいと考えているからでもある。

さて、生活に即した地域の遺産を考える際、文化的景観に関する議論が大変重要である。日本における文化的景観の概念は、世界遺産において1992年に追加されたカルチュラル・ランドスケープの概念と重なる部分が多く、「地域の風土と人々の営みの相互作用が景観に表象する」ということを前提としている（文化的景観学検討会、2016、18ページ）。つまり建築遺産単体や視覚的な景観だけではなく、それを作りだしている地域の生業や自然環境の関係性も含めて評価していく包括的な概念といえよう。文化的景観に関する議論は近年多く、特に奈良文化財研究所が研究を蓄積しているが[2]、文化的景観を構成・担保する建築遺産や古写真、記憶などを、ワークショップやデータベースなどの住民参加型の手法を通じてどのように有機的に繋げていくかという点に関しては、まだ実践や研究は多くない。本稿はそうした点に貢献することを目的としている。

また、人口減少社会における都市や地域の計画のあり方を論じる専門書や一般書は、都市計画学では例えば饗庭伸らの研究（饗庭伸2015）、農業土木工学では林直樹らの研究（林直樹ほか、2010）、社会学では簑原敬、宮台真司の書籍など（簑原敬・宮台真司、2016）、現在大変盛んに出版されている。なかでも饗庭は、斑鳩町のようなスプロール化してしまった地方農村や小都市、あるいは郊外住宅地が、将来スポンジ状になるであろうことを論じており、斑鳩町の今後を考える上で示唆に富む。本研究もそれらの研究と問題意識を共有している。

次に、斑鳩町の建築遺産を扱った先行研究・参考文献をあげると、基本書となるものは『斑鳩町史』である（斑鳩町史編集委員会、1979）。また大場修らによって1985年に出された斑鳩町の龍田および西里に関する古い街道・集落に関する調査報告書は重要である（大場修、1985）。

---

[2] たとえば最新の研究では、京都府宇治市と石川県金沢市を対象とした文化的景観の取り組みや情報を扱ったものがある（奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室　2017）。

大場らの研究は記録として高い価値を持つ一方で、斑鳩町全域を対象としたものではなく、建築史的な実測や住まい方インタビューなどが情報の中心となっている。そのため地域の文化遺産の発見手法やその情報の活用などを考察対象とする本稿とはやや関心を異にする。

２．斑鳩の概要とその変容

本稿が対象とする斑鳩町は、奈良盆地の北西にある矢田丘陵の南側斜面に位置し、東西4.4km南北6.4kmの広さを持つ。まちの西部を竜田川が、東部を富雄川がそれぞれ南に流れ、それらは南部を西流する大和川に合流する。法隆寺が建つまちの北部は矢田丘陵の緩やかな斜面に属し、標高も50m程度を保つ[3]。そして南に行けばいくほど標高は低くなっている。また、多くの集落が古代から続く極めて古い歴史を持っており、当然ながら古い神社や寺、なかには古墳を抱えている。加えて旧街道町（大阪から伊勢へと抜ける）や国鉄の法隆寺駅設置にともなってできた駅前の集落などもある。

次に人口に注目すると、図２のように第二次大戦前の斑鳩の人口は、漸増してはいたが6000～8000人程度であり、その間にあった空間構造の大きな変化は、せいぜい駅前の集落の出現程度であったと考えられる。しかし1960年代以降は人口増加が顕著となった。そして1998年前後に２万9000人程度となったのを境にして漸減傾向となり、現在は人口２万8000人程度となっている。当然ながら今後減少はより顕著になると推測される。

人口の増減を見ると1960年代以降の人口急増の時代に、斑鳩町の空間構成が大きく変化しはじめたのは明らかであり、流入してきた人々は、概ね大阪や奈良市内に勤務する人々であったと考えられる（斑鳩町史編集委員会、1979、579ページ）。住民全員に通用する厳密かつ公的な定義ではないが、斑鳩ではこうした流入層を「新住民」、それまでの住民を「旧住民」と呼び便宜的に区別している。

そうした旧住民は、戦前までに形成された古い歴史を持つ集落に住んでいたのは当然だが（図３内の黒い部分）、一方の1960年代以降に増加した人々は、丘陵や田畠などを開発してできた団地に流入してきた（図３内のグレー部分）。もちろん1960年代以降に団地に移り住んだ旧住

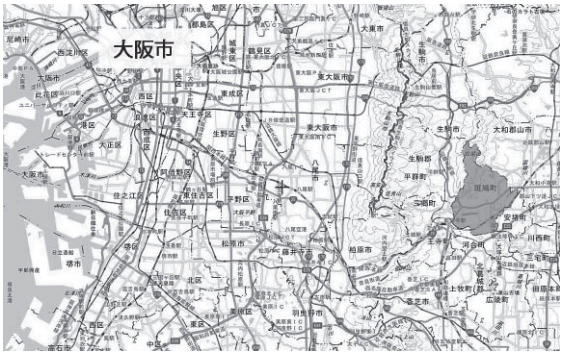


図１　奈良県生駒郡斑鳩町の位置

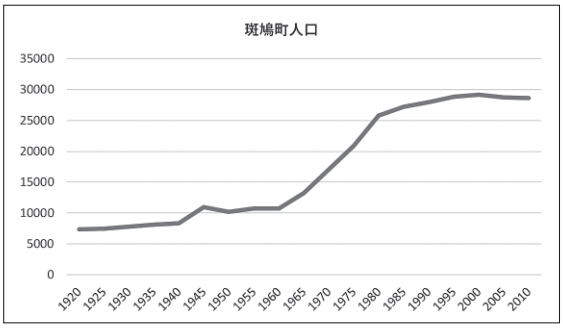


図２　斑鳩町の人口
（縦軸人口、横軸西暦。『斑鳩町史』より筆者作成）

図３　旧集落と戦後の宅地の広がり
（『斑鳩町史』、国土地理院地図及び航空写真より筆者作成）

[3]　斑鳩町役場付近で標高は49.7mである。

民、旧集落に入っていった新住民もいるが、彼ら・彼女らが大勢を占めたと考えるのは無理がある。こうした歴史は、旧集落内に近世・近代の建築遺産が多く、団地などの新集落内に近代・現代の建築遺産が多くあることを予見させる。

斑鳩において筆頭にあげられる文化遺産は法隆寺を中心とする古代の建築であり、それらは1993年に姫路城とともに日本で最初に世界遺産登録された。もちろん、この世界遺産化を通して法隆寺が有名になったわけではない。例えば1979年に出版された『斑鳩町史』には、「都会に行き、私は斑鳩に住んでいる、といっても他の人には一向に斑鳩町という所を知らない人が多い。でも法隆寺の近辺といった方が、他人にもよくわかる。斑鳩とはそういうところだ」と子どもの作文が紹介されている。世界遺産になる前から法隆寺は国宝として著名であり、現存する世界最古の木造建築物として日本社会で注目されてきた。斑鳩町は法隆寺に付随する形で想起されてきたのであり、町史に記載された子どもの思い出話は、筆者らの子どもの頃からの経験にも当てはまる。この他にも藤ノ木古墳などに代表される古墳や[4]、在原業平に関する旧蹟、戦国時代の竜田城跡地や幕末維新期の天誅組ほかの遺構など、多様な時代の文化遺産がある。

３．斑鳩町における近過去の建築遺産悉皆調査

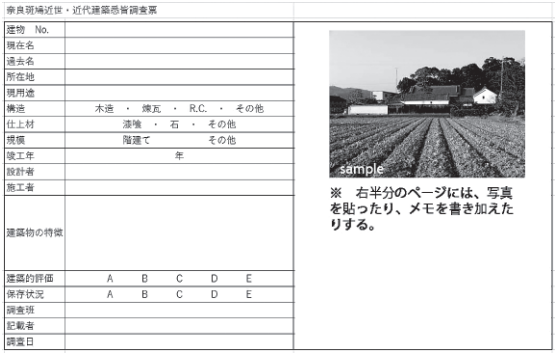
筆者らは斑鳩町において、近世・近代期に建設されたと考えられる近過去の建造物をくまなく観察して歴史的価値を判断した上で、リスト化する調査を2000年より2005年まで行った。調査者は筆者ら２人を基本とし、当時大学院ないし大学で建築史を専攻していた学生たちに適宜助力を願った。調査期間はのべ30日程度だが、まだ学生であった筆者らの夏休みや春休みなどを利用して断続的に調査を行ったために５年間の長期調査となった。

調査は次のような手法を採用した。斑鳩町のすべての道を歩き、すべての建築を観察する。また建築以外に重要だと判断した橋梁や水路などの土木構造物もできるだけデータを採取する。モニュメントや地蔵などの小規模なものも同様の対処法をとることとした。そして法隆寺などに代表される既存の神社仏閣などに関しては、すでに公的な情報があると判断し、基本的にはデータを採取しない、とした。

次に主となる建築遺産に関するクライテリア（評価基準）を述べる。まず建築史的評価と保存状況評価の二軸に分け、それぞれＡからＥまでの５段階評価とした。このうち前者は建築史学上の価値（建築史的価値）としたが、その際の「建築史」は広くとることとし、地域の建築史や都市史はもちろん、その地域で生きた人々のアイデンティティや技術などが垣間見ることができれば、高く評価することとした。当然揺らぎがあるが、最大限観察者同士で議論や修正を行いつつデータを採取・整理した。Ａをつけたものは、「その地域の歴史や文化をよく継承・反映し、建築としても創造性や美的価値を備えているもの」とした。ただし、例えば建築のデザインとして評価できなくとも、極めてその地域の歴史にとって重要で希少性の高い建築であればＡとつける場合もあった。逆にこの地域にはよく見られるものであり、同様のものが多数存在する場合（希少性が低い場合）はＣ、希少性が低く質もよくないと判断したものはＥと判定した。こうした評価基準を設けた狙いは、その地域の歴史や文化・社会的文脈を反映したものを文化遺産と認め、それらを集めることを目的としていたからである。

保存状況に関しては外観からの判断であり、大半の建築の内部は未確認のため、この点についても揺らぎがある。Ａを「大変よくメンテナンスされていると同時に、今後も使い続けることが十分可能な建築」とし、Ｅを「廃墟のような建築」とした。こうした保存状況の判断を行った理由は、今後の再利用や価値の再生を促すことも調査の目的に含めていたからである。当初から成果を地域の計画などへと接続していくことを筆者らは考えていた。なおこの建築史的価値・保存状況に関するクライテリアは、東京

[4] ６世紀の円墳で、1985年から大々的に発掘調査が始まり、馬具を始めとする出土品は注目を集めた。現在古墳は保存され、出土品は国宝となっている。


奈良斑鳩近世・近代建築悉皆調査票

建物　No.	
現在名	
過去名	
所在地	
現用途	
構造	木造　・　煉瓦　・　R.C.　・　その他
仕上材	漆喰　・　石　・　その他
規模	階建て　　その他
竣工年	年
設計者	
施工者	
建築物の特徴	
建築的評価	A　B　C　D　E
保存状況	A　B　C　D　E
調査班	
記載者	
調査日	

図４　悉皆調査時のデータシート

大学生産技術研究所の藤森･村松研究室（当時）の手法と同じものを用いたが、同クライテリアは現在より洗練されている[5]。

データシートは図４のようなものであり、採取データ毎に番号を振り、住所、建築名（保有者名）、建築類型、設計者、施工者、建設年、建築物の特徴などをその場で記録した。シートの右半分には撮影した外観写真を貼り、適宜特徴を示すディテール写真やスケッチなども付加した。また別に2500分の１の地図を用意し（斑鳩町、1999）、データを採取した際には地図上の該当する位置にデータ番号を記した。

４．調査結果とその分析

調査結果は次のようになった。採取物件数は約550件にのぼった。「約」とつけたのは、同一敷地内に複数の建築遺産などが含まれていたり、小規模なものを合一のものとして判断したものが含まれているからである。建築類型に分けてみると、伝統的な農家や町家が中心ではあったが、その他に工場や工業化住宅、茶室や橋梁など多様なものが集まった。そしてより踏み込んだ調査や評価を後にするために、評価が高いものを全体の中から１/３～１/４程度選び、約150件の重要建築遺産リストを作成した[6]。そのリスト内の集落ごとの数や傾向の概略を示したものが図５である。

本稿では採取データの細かな整理や、それら

順位	集落名	合計	特徴
1	龍田１～３丁目	22	町家等
2	法隆寺西（西里）	13	農家等
3	法隆寺南（並松）	11	町家等
	法隆寺１～2丁目	11	町家等
4	神南３～５丁目	10	現代住宅ウエイト大きい
5	五百井	7	近代建築遺産含む
6	興留東	5	
	三井	5	農家等＋水路
7	阿波1丁目	4	農家等
	稲葉	4	農家等
	興留４～８丁目	4	
8	白石畑	3	農家等
	高安	3	農家等
	法隆寺境内内	3	近代建築遺産
	龍田６丁目	3	町家等
	服部１丁目	3	農家等
	目安	3	農家等
	阿波３丁目	3	近代建築遺産
	岡本	3	農家等
9	神南１～２丁目	2	
	小吉田２丁目	2	近代建築遺産
	興留１丁目	2	農家等
	稲葉車瀬	2	農家等
	法隆寺北	2	
	法隆寺東	2	
	幸前	2	
	その他	16	

図５　重要建築遺産リストの集落別内訳

図６　世界遺産のバッファゾーン
バッファゾーンは法隆寺周辺と丘陵部のみ。南側の旧街道筋や多くの旧集落はカバーされていない。（国土地理院の地図をもとに筆者ら作成）

の建築史的価値や位置、材料や年代などの分析は目的としていないために詳細は別の機会に譲る。ここで重要なことは、多様な建築遺産を拾い上げることができたという点である。特に、建築史の専門家から見た時に、歴史的価値があると考えられる物件が550件余、そのうち特に重要なものは約150件もあった。斑鳩の近世・近代の建築遺産を数値で表すことができたと同時に、それらの分布や広がりを地図上に視覚的

[5]　斑鳩の調査時に最も近い時期の論文で、評価基準などを扱ったものとしては、筆者の研究（Ryuichi Tanigawa. 2002）（谷川竜一、2006）など。
[6]　正確には144件だが、こちらも１物件内に複数の遺産を含むものがある。

に示すことができた。また、いわゆる斑鳩の文化遺産といえば古代の遺物が取り上げられる傾向が強くなるなかで、揺らぎはあるといえども統一の評価基準を用いて近世・近代の建築遺産を、多様かつ多く示したという点で意義があったと考えている。

この成果を踏まえ、２点のことをここで確認しておきたい。

１点目は、地域の建築遺産が置かれた状況を世界遺産との関係で捉え直す必要性についてである。筆者らは、世界遺産・法隆寺のバッファゾーン（緩衝地帯）と斑鳩の建築遺産分布図を重ねてみた。するとバッファゾーンに関係なく、古い集落を中心に多くの建築遺産が分布していることが分かった（図６）。ユネスコの定めるバッファゾーンは世界遺産保護のための利用制限区域であり[7]、当然だが筆者らが「発見」した建築遺産を守るものではないのである。世界遺産を守ることと、まちや地域の生活を支えてきた建築遺産を守ることは異なることを住民側がはっきりと意識する必要があるだろう。

２点目は、住宅の多様性である（図７）。例えば多数を占める旧集落内の農家や町家のなかに、少なくとも江戸時代半ばにまで遡る旧家などが散見された。また大正初期の洋館があったり、1960年代以降に形成された新集落内には後に大手ハウスメーカーとなる大和ハウス工業が開発した初期工業化住宅などが群で残っていたりした。さらに人口急増期であった1970年代に建設された長屋なども住民たちの歴史を示す貴重な遺産であろう。加えて著名建築家である村野藤吾や分離派の山田守などが手がけた戦後建築もあった。これらはいずれも世界遺産・法隆寺の文脈とは全く異なる建築遺産である。いわば近世以降の斑鳩の住民たちのステータスや歴史を物語るものと言えよう。

左：擬洋風の洋館。ピラスターの柱頭に天使の造形がなされている。
右上：状態のよい大和棟の住宅。
右下：大和ハウス工業の住宅

図７　採取した建築遺産の一部

５．調査成果の公表とそれへの応答

この調査成果を活かし、悉皆調査で発見した大正初期の洋館を住民との協働のもとで登録文化財に申請するとともに、そこで悉皆調査の成果報告展覧会などを行った。この展覧会において筆者らは、「近所にこのような建築があったなんて」という感想を地域住民から何度も聞いた。また斑鳩の住民への無作為インタビューなども適宜行ったが[8]、多くの住民は斑鳩といえば法隆寺と答え、思い浮かぶ法隆寺以外の建築遺産はあるかとたずねると戸惑うものが多かった。こうした活動のなかで筆者らは、住民にさえも冒頭で述べた「斑鳩＝法隆寺に代表されるイメージ」が強くあることを再認識したわけであるが、調査成果を新聞報道した際に集まった感想の一つに最も驚いた。記事は「法隆寺の陰、隠れた遺産守れ」というタイトルで、2005年11月11日の朝日新聞朝刊の奈良版ページに大きく掲載された。記事のリード文は次のようなものである。

斑鳩町出身の大学院生らが、世界遺産・

[7] なおバッファゾーンに関しては、世界遺産を守るためであっても、十全に機能していないという議論が近年なされている。「登録資産の周辺地帯あるいは緩衝地帯としての機能を超えて、資産本体ではないとしつつも、資産本体との連続性や一体性が期待され、さらには精神性の共有等が要請されるようになってきている」（崎谷康文、2016）

[8] マリス・エマニュエルほか作のショートムービー『斑鳩の夏』に収録。同作品は、国際映画コンペティション「mAAN 2006 ショートフィルムコンペティション　here, there and everywhere… 遺産と資産に囲まれて生きる」（第６回 mAAN 国際会議2006［東京］「our modern／われらがモダーン：アジア都市遺産を再認識する」東京大学生産技術研究所、2006年）への出品作である。

法隆寺の陰に隠れて顧みられない町内の歴史的な建物などを「発掘」し、「斑鳩の遺産台帳」を作った。調査の結果、18世紀に建てられた民家などが多数見つかり、150件を収録した。今後は保存方法を探っていくほか、建物などの所有者の同意が得られれば、遺産台帳をインターネットで公開することも検討している（『朝日新聞』2005年11月11日、朝日新聞社、奈良版朝刊）。

先に述べたように調査後の2005年の11月の時点で、筆者らは550件余の遺産台帳の中からさらに重要な約150件を選別していた。ここで紹介されている150件というのは、550件のなかから筆者らが与えた評価ポイントが高いものを選んで作成したものである[9]。先述したように記事にはいくつかの反応が寄せられたが、筆者らが最も驚いたのは住民と思しき方からのもので、「聖徳太子さんのことを調べてくれて、どうもありがとう」という感想であった。タイトルに「（建築遺産は）法隆寺だけではない」ということが明言された記事であるにもかかわらず、そうした印象を持ったということである。換言すればどんなメッセージを発しても、法隆寺や聖徳太子を中心とする斑鳩の既成イメージに回収されてしまう強固な前提があることがわかる。

ただし、こうしたことを筆者らはことさら非難したいわけではない。むしろこの感想は、聖徳太子を「さん」づけで呼ぶような不思議な親近感を醸し出している。冷静に考えてみれば、斑鳩や北和地域以外の人が、聖徳太子を「さん」づけで呼ぶことはまずないだろう。つまりその感想からは、発信者は法隆寺の周辺に住み、法隆寺を極めて身近に感じて暮らしている生活者の一人であるような印象も受ける。自省的に述べれば筆者らこそが、世界遺産に地域の建築遺産を対置しようとするあまり、法隆寺や聖徳太子を生活から切り離された記号と決めつけ、それらを（実態はともかく）身近に感じて生活してきた住民のアクチュアリティを、想像できていなかったのではないか。彼ら・彼女らにとっては、法隆寺や聖徳太子は生活と地続きなのだ。

この点を踏まえれば、悉皆調査で「発見」した建築遺産を、時に法隆寺とも絡めながら住民の生活意識のなかに再配置していくことが重要と考え、次のような試みを開始した。

６．住民一人一人の生活史としての地域の写真

2012年から筆者らは、以下で述べるように複数の主体と協働して、斑鳩町の近世・近代建築や景観が写り込んだ古写真――主に住民の生活写真――を集めるワークショップを開催してきた。そしてその写真を保管・整理・公開するためのデータベースの開発を進めている。目的は次の３点である。

１点目の目的は、前節で述べたように、建築遺産を単なるリスト上の個別のデータではなく、生活環境の延長として捉えなおす機会や装置を開発することである。そのために、住民一人一人の生活が建築遺産とともにあったことを確認するツールとして写真を用いることとする。もちろん、写真では表象不可能な記憶や遺産も多い。したがってここではあくまで手近なツールの一つとして捉えていることを強調しておく。

２点目は、写真を通して住民同士が共有可能な一つの記憶のプラットフォームを形成することである。斑鳩町は20世紀半ばに大量の新住民が流入したが、その新住民と旧住民では価値観の相違など一定の断絶がある。しかしその子ども世代である筆者らの間では、小学校でともに暮らした経験などを共有している。断絶を埋めていくためにも、そうした共有可能な要素を再確認する装置は重要と考えている。

３点目は、この事業を通じてまちづくりに役立つアーカイブを図書館内に設けることである。斑鳩町立図書館内にある聖徳太子歴史資料室は、字義のまま受け取れば聖徳太子関連の資料と判断されがちだが、実際は斑鳩町に関する歴史資料の収蔵庫である。聖徳太子歴史資料室以外にまちづくりに有効な資料やデータをスト

[9] こうした選別が問題を持つことも筆者らは把握していたが、550件のデータを公開することはハードルが高いと判断し、この時点では数を絞っていた。

図８　ワークショップの様子

ックする施設は斑鳩にはなく、筆者らは聖徳太子歴史資料室が最適であると考えた。

次に、ワークショップの概要をより具体的に説明する。この取り組みは、聖徳太子歴史資料室および筆者ら、そしてRAD（主として榊原充大氏）との共同事業とし[10]、発案は筆者らだが事業主体は聖徳太子歴史資料室にある。半年～１年に１回程度、斑鳩町内の主な集落とその周辺地域を対象地域とし、そこに住む住人を中心に10人程度募り家にある古い写真を持って資料室に集まってもらう。参加者は、斑鳩町広報などで広く募集するが、主要構成者は聖徳太子歴史資料室のスタッフのネットワークを活かし、図書館や聖徳太子歴史資料室によく来る人に予め声を掛ける場合が多い。

ワークショップは各回３時間程度で、予め提出してもらった写真を資料室や筆者らで整理・スキャン・複写し、それらの写真をテーブルの上に該当地域の地図（Ａ０サイズ程度の大きな地図）とともに並べておく。そしてワークショップ当日に、撮影年、場所、それにまつわる思い出を、図書館スタッフ３～４名、及び筆者らがそれぞれにマンツーマンで張り付いてインタビューし、記録する。また写真に付随する思い出を付箋に参加者個人が書きとめ、それを地図の上に写真とともに貼り付ける作業も時に行う（図８）。

[10] RADは、Research for Architectural Domainを正式名称とし、京都に拠点を置いて「建築、空間、まちに関する調査と提案」を行う活動体であって、榊原氏はそのメンバーの一人である。

図９　斑鳩の記憶データベース「チエノワイカル」の表示例
（左に住民の写真、右にその位置を地図上にプロットしてある。撮影年や写真にまつわる思い出、背景に写り込んでいる建築やまちなみの情報などが記載されている）

ワークショップ終了後は、開発した斑鳩の記憶データベース「チエノワイカル」に、写真データや思い出話をアップロードする[11]。また、写真の公開方針は「クリエイティブ・コモンズ表示非営利 -改変禁止2.1日本ライセンス」に準拠して処理している。写真は思い出だけでなく、撮影年、場所情報なども含めてデータベース化し、斑鳩の主な古い道、写真に写された住民の活動、写り込んだものの種類などに応じたタグを付している（図９）。

本データベースは、2015年10月１日に正式公開し、今日まで運用されている。2018年１月22日時点で、約400点の写真情報が公開されており、今後も増える予定である。

７．ワークショップの結果と考察

ワークショップを通じて収集した写真を説明すると、概ね1960年代以降の高度成長期からバブル期にかけてのものが中心となっている。子どもの記念写真が多く、その背景には前述の悉皆調査で筆者らが採取した建築遺産などが多く写り込んでいる。また、宅地化されていない田畠や、切り開かれる前の里山の景観、戦後に新設された国道25号線やバイパス（奈良県道５号大和高田斑鳩線）などの工事風景などが写り込

[11] http://archive-ikaruga.org/

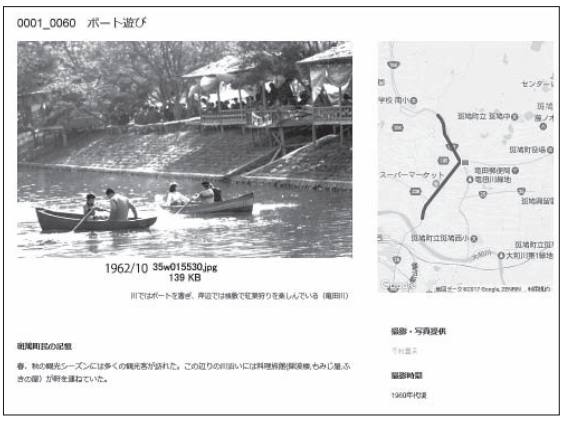


図10　「チエノワイカル」に収録した竜田川の船遊びの風景

んでいる。もちろん、神社や寺の境内、公園における子どもの遊びの様子や大人たちの生活の風景なども少なくない。なかでも竜田川における船遊びの風景などは（図10）、現在のように高く護岸される前の竜田川の水辺が、いかに住民たちのレクリエーションの場として魅力に満ちていたかということが伝わってくる。

データベース内におけるタグ付けは、道、暮らしや産業、建築、まち、交通、自然、生物となっている。それぞれには下位のタグがついており、例えば道であれば竜田街道（東・西）などを含め10本の道がある。暮らしのタグであれば、衣類・食・祭・行事・学校・娯楽といったサブのタグが用意されている。これらはRADの榊原充大氏との議論で選定していったタグであり、ワークショップ後のデータ入力作業において、聖徳太子歴史資料室のスタッフがひとつひとつ丁寧に分別・選択している。写真の細かな分析は別稿に譲ることとし、このワークショップを通じた発見を３点述べる。

１点目は、異なる住民同士の関心・能力を相互に理解し、それを発揮する場としてこのワークショップが機能したことである。ワークショップでは先述のように予め図書館のスタッフが目を付けていた人物に声をかけて集まってもらうことが多かった。その場合、必然的に図書館に普段から出入りし、スタッフとコミュニケーションをよくとっている住民が選ばれがちになる。しかもそうした来観者は目的をもって調べたり、スタッフに相談しにきたりする人が多い。つまり、そもそも地域に何らかの関心を持っている場合がほとんどであり、今回のワークショップでも、地域の写真を撮り続けている人や、野鳥に関心をもって長く観察を続けている人、郷土史に興味を持って調べている人などが参加してくれた。そしてこうした人々に連続してワークショップに参加してもらうことで、知見の提供のみならず、彼ら・彼女ら相互のネットワーク化に貢献できるとともに、彼らの知見がこの取り組みに有効であることを相互確認できる場となった。また、データベースのタグなどは、彼らと相談し、修正したこともある。そうした点で筆者ら運営側にも大きな力となった。

２点目は、悉皆調査のデータと古写真を繋ぐ物語の発見である。筆者らが採取した近過去の建築遺産データは、あくまで建築史的価値と保存状況に関する自己完結的なデータであった。しかし本ワークショップでは、それらの建築が写り込んだ古写真が多く集まった上、そこには住民一人一人の思い出が付随しており、必然的に物語のなかの建築遺産を再確認することができた。残念ながらまだ悉皆調査のデータを、この斑鳩の記憶データベース「チエノワイカル」と統合できていないが、そうした建築遺産の物語化にこのワークショップやデータベースは有効であると認識できた。

３点目は、集まった写真に地域的・内容的な偏りがある点である。高度経済成長期やバブル期においては、カメラが大衆化したとはいえ、現在のように写真を取ることは手軽ではなかった。当然だが、何かしらの記念や記録のために写真を撮影したのであり、その結果写真は子どもの七五三などのハレの日、あるいは公園のような「分かりやすい」遊びの風景、小学校の学級写真などの集合写真が重きを占めた。その結果、写真の場所が重なったり、似た場所になったりすることが多かった。このことは視点を場所の側に置き換えれば、その場所が住民たち共通の経験を造り出す、一種の共通基盤となってきたことを示している。具体的に言えば、竜田川の水辺、法隆寺周辺、斑鳩小学校内などがそうである。そうした場所は、斑鳩という地域の記憶の柱を構成していると言ってもいいであろう。一方で、写真の少ない地域や場所が、意味

や物語を筆者らに想起させづらいという課題も浮上したことも記しておく。

以上のように本ワークショップは、地域に関心をもつ住民たちをネットワーク化し、彼ら・彼女らの活動をまちづくりに関連付けるとともに、数多く存在する建築遺産を住民の記憶や経験という物語のなかに再配置する機会となった。そして集まった写真からは、斑鳩町民が高度成長・バブル期においてどのような場所で共通の記憶や経験を育んで来たかということが照らし出される結果となった。

8．結論

本稿では斑鳩町における筆者らの活動を概観した。具体的には、「2000年～2005年の悉皆調査を通じた建築遺産台帳の作成」、それに加えて「2012年より開始した住民の生活史と建築遺産の歴史を接続していくためのデータベース作成を目的とした連続ワークショップ」という二つの取り組みの報告であった。これらから筆者らは、１）国やグローバルな観点から価値付けされた国宝や世界遺産に対して、地域の生活に即した建築遺産が多数見逃されている事実を確認した。しかも世界遺産が造り出す観光や住宅開発などの圧力に押されて、それらの多くは価値を顧みられることなく消失の危機にさらされていた。その事実を踏まえ、２）ワークショップを利用して古写真を集めることで、住民の共通の思い出や経験を媒介に建築遺産や関連する景観を価値付けることができる可能性がひらけていることを示した。具体的にはその成果は斑鳩の記憶データベース「チエノワイカル」となった。

それではこうした斑鳩町における取り組みが、日本社会において今後もちうる可能性とはいかなるものだろうか。それを３点にまとめて、この取り組みから得られた見通しとして、結論に代えたい。

１点目は、人口減少社会に即した新しい地域の計画に向けて、建築遺産や古写真のデータは利用可能であり、むしろ使っていくべきであるということである。集まった古写真のなかには、高度成長期やバブル期において子どもたちが遊ぶ様子や、人々が集まってレクリエーションやお祭りなどを楽しむ姿が多くあった。これらの記憶は戦後とはいえ、すでに今日50年以上の歴史の重みを持つ。前章で確認したように、そうした場所は往々にして重なり、そこが斑鳩に住む人々の共通体験を支える重要な場所となってきたことは明白である。今後人口が減り、高齢化が進む中で、建築はもちろん上下水道や道路などのインフラストラクチャー（社会基盤施設）の維持や更新が難しくなるだろう。そして斑鳩のようなスプロール化したまちに住むことは、いたずらに社会基盤施設費の維持費を増すことになる。そうだとすれば私たちの子孫は、縮小する経済のなかで何を残し、何を放棄するのか、という選択に向き合わざるを得ない。そのとき、住民の生活を支えてきた建築遺産や社会基盤施設のなかでも、共通の思い出や経験を提供してきたものは、まちのアイデンティティを補佐するものとして重要である。それらは文化的景観とも言えるであろうし、宇沢弘文が強調する地域社会を支える社会的共通資本であるとも言えるだろう[12]。その地域で生活をする上で何が大

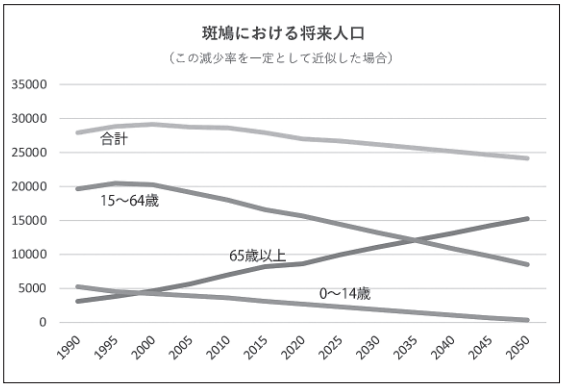


図11　斑鳩町の将来人口
（斑鳩においてこのままの調子で人口が減れば、2050年には65歳以上が1万5000人を超え、14歳以下の人口がゼロになる。もちろん、これは減少する傾きを一定とした非現実的な推計だが、それくらいの勢いで現在人口が減り始めている。この人口減少のなか、どのように問題を最低限におさめつつ、持続可能社会へ軟着陸させるかのかは、斑鳩だけでなく多くのまちに共通の課題である）

[12]　経済学者・宇沢弘文の提唱する社会的共通資本は、1つの国ないし特定の地域が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような自然環境、社会的装置を意味する（宇沢弘文、2015、45ページ）。

切なのか、ということを忘れることなく記録し続けねば、将来の選択の際に失敗を犯しかねない。

２点目は上記と重なるが、建築遺産台帳や斑鳩の古写真・記憶のデータベースが、地域固有の価値の創出に貢献しうることである。現在工場で作られる製品はグローバル化によってコモディティ化しており、そうした企業が重視するのは体験価値の提供であると言われている（白石弘幸、2015、３ページ）。これは小さな製品に限ったことではなく、住宅選びにおいても同じであると考えられる。例をあげれば、地域の不動産業者が、自らが建てる家を価値付けしようとするとき、子どもたちの遊び場や大人のレクリエーションの場は、貴重な体験価値の付与の場として宣伝効果を持つのではないか。まちに古く文化的な建物が多く残っていることだけでなく、そうした場所の歴史を写真や記録を通して50年以上遡ることができる――それは言い換えれば昔からここで子どもが安全に遊び、大人が文化的に豊かな生活をしてきたということの証左でもある。そのことがデータベース他で示されれば、それは新たにそのまちに住もうと考えている人々に対する一種の歴史的保障となりうる。深い体験価値を提供可能な場所であることを伝えるメディアとなる可能性を、建築遺産のリストやデータベースは秘めているのだ。

３点目は、建築遺産や古写真、思い出などのデータそのものをマネジメントしていく具体的な場所を確立していく必要性である。この場合、地域の図書館が現時点では最もふさわしい、と筆者らは考えている。先述したように、筆者らのワークショップを行うにあたって、それを基本的に支えてくれたのは、図書館スタッフとそこに頻繁に出入りしていた地域住民である。いわば彼ら・彼女ら同士の関係があってこそワークショップは可能であった。図書館に頻繁に出入りしているのは、2017年現在、仕事をリタイアした団塊の世代が圧倒的に多い。このことは、地域で遊んだり繋がったりすることのできない老人たちが、「仕方なく」、「暇つぶし」で来館するという風に消極的な文脈で語られることもある。だが彼ら・彼女らのなかには、身の回りのことを調べ、長く観察し続けてきた人たちが一定数いる。まちはその知見や能力を相互に繋げて共有し、今後に向けて有効活用するべきであると筆者らは考える。その際に地域の図書館は、そうした人たちが集まるハブとなっており、図書館のスタッフはそれぞれの個性やネットワークまでを熟知した存在となっている。図書館スタッフは地域の知のファシリテーターと見なしうるのである。それは歴史的に形成されたかけがえのないまちのリソースであり、したがって彼ら・彼女らが活動する地域の図書館は一種のシンクタンクやコンサルタントに転化できるはずだ[13]。

以上、斑鳩町の建築遺産や古写真などの歴史的な文化遺産が、固有の価値の提供やそれをもとにしたまちづくりに繋がる可能性を議論してきた。ただし、そうした歴史に立脚したアイデンティティの模索に傾注しすぎることもまた問題である。歴史的なものに根ざしたアイデンティティは、社会学者の宮台真司が述べるように、過去を共有しない者たちを遠ざけてしまう可能性がある 。世界遺産だけではなく、地域の生活のなかから文化遺産を考えることは、個々人の記憶を大切にしつつ複数の価値の存在を認めていく試みでもある。そうだとすれば、新しい住民たちを受け入れ、新たな文化や歴史を造り出すことのできる余地を保つこともまた大切だ。筆者らはこうしたことを考察しつつ、今後も斑鳩町において取り組みを行う予定である。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、調査でお世話になった全ての方々に、ここに謝意を表しておきたい。また本稿は、斑鳩町立図書館のスタッフの方々、ならびにRADの榊原充大氏との協働事業の成果でもあることを再度強調しておきたい。なお、この原稿が出来上がる直前に、斑鳩の誇る郷土史家の蔭山精一氏が永眠された。同氏にはひとかたならぬご支援を賜った。最後に、蔭山氏への深い感謝を記して、本稿を結ぶこととする。

[13] 地域の知の総合コンサルタントとなるということは、岡本らも述べる魅力的なアイデアである（岡本真/森旭彦、2014、156～164ページ）。

参考文献

文化的景観学検討会　2016『地域のみかた―文化的景観学のすすめ―』奈良文化財研究所、奈良。

奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室　2017『都市の営みの地層―宇治・金沢』奈良文化財研究所、奈良。

饗庭伸　2015『都市をたたむ　人口減少社会をデザインする都市計画』花伝社、東京。

林直樹ほか　2010『農村の撤退計画』学芸出版社、京都。

簑原敬・宮台真司　2016『まちづくりの哲学：都市計画が語らなかった「場所」と「世界」』ミネルヴァ書房、東京。

斑鳩町史編集委員会　1979『斑鳩町史』斑鳩町。

大場修ほか　1985『斑鳩町（龍田・西里地区）歴史的町並調査報告書』斑鳩町。

斑鳩町史編集委員会　1979『斑鳩町史』斑鳩町。

谷川竜一　2006「都市遺産悉皆調査手法の洗練とその社会的インパクト」『技術報告集』第12巻、27-32ページ、東京大学生産技術研究所、東京。

斑鳩町　1999「斑鳩町都市計画図　1:2500地形図（1989年作成・1999年修正）」斑鳩町。

崎谷康文（日本イコモス国内委員会　第８委員会主査）2016「日本の世界遺産の保護施策の充実のために～バッファゾーンをめぐって～（予備的提言）」日本イコモス国内委員会事務局、http://www.japan-icomos.org/pdf/20160701subcom8.pdf

宇沢弘文　2015『宇沢弘文の経済学』、日本経済出版社、東京。

白石弘幸　2015『脱コモディティへのブランディング』、創成社。

岡本真 /森旭彦　2014『未来の図書館、はじめませんか？』青弓社、東京。

Ryuichi Tanigawa. 2002. Establishing a Standardized Survey Manual for the Comprehension of Modern Heritage in Asian Cities: Based on a Survey Conducted in Medan, Indonesia, 2002. *Documenting Built Heritage: Revitalization of Modern Architecture in Asia,* pp.29-38, mAAN, Indonesia, Surabaya.